11 月 13 日のメッセージ

聖書：出エジプト記　3：　1－15

「アブラハムの神、ヤコブの神、イサクの神」

神からのメッセージはいつ、どこで聞こえてくるかわかりません。人間のタイミングではなく、神がその時を定められるのです。

モーセはエジプトで人を殺めてしまい、ミディアン地方へ逃れてきたました(「モーセは……エジプト人を打ち殺して死体を砂に埋めた。」出エジプト記 2:12、「モーセはファラオの手を逃れてミディアン地方にたどりつき……」2:15)。そこで祭司エトロの娘と結婚して、安定した生活を送っていました。もう何の心配もありません。安心しているモーセに向かって、神は突如、「立ち上がれ」と呼びかけられます(「今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」出エジプト記 3:10)。しかも、追われて逃げ出してきたエジプトへ戻れと言うのです。やっと落ち着いたと思ったのに。モーセの偽らざる感情でしょう。神がイスラエルの同胞の痛みをご覧になって、救いたいと思われたことはわかる。しかし、なぜ自分なのか。

ただし、モーセは神が全能の神であることを知っています。だから、受け入れようとはします。が、無駄だとわかりつつ、抵抗することも諦めません。「自分が行っても、人々はにわかには信じないだろう(≒「誰がお前を我々の監督や裁判官にしたのか。お前はあのエジプト人を殺したように、……」出エジプト記 2:14)。どうすれば、皆はあなたの遣いだと認めてくれるのか。せめて名前を教えてほしい」と。

被造物としては分不相応な願いにもかかわらず、神はモーセに応えられます(「神に向かってわたしは声をあげ／神はわたしに耳を傾けてくださいます」詩編 77:2)。これは、イスラエルの民の痛みを聞かれる姿勢と同じでしょう(「見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた」出エジプト記 3:9)。だから、神は名を明かされます。「わたしはある。わたしはあるという者だ」(出エジプト記 3:14)と。

そして、神は「こう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主が……遣わされた」(出エジプト記 3:15)と続けられます。これは、神が歴史を通して働かれる方であることを示しています。そればかりではありません。これまで神が全ての人々と結んでこられた契約の中に、今、生きている一人ひとりが含まれることを言っているのです。「今後決して滅ぼすことはない」「あなたの子孫を星の数ほどにする」「あなたの立ち帰りを待っている」……etc.

「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである」(ルカによる福音書 20:38) 。その神がいつも共にいるのだから、何の心配も無い。神はそう言って、モーセの背中を押しました。そして約束通り、イスラエルの民はエジプトから救い出されたのでした(「まさにこの日に、主はイスラエルの人々を部隊ごとにエジプトの国から導き出された。」出エジプト記 12:51)。

これで万々歳とならないのが人間の悲しいところでしょう。救われたはずの人間は、またも神から離れようとしてしまいます。自分勝手に生きようとします。だから神は、今一度、私たちと約束し直そうと呼びかけられています。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」(出エジプト記 3:6)

神が歴史を通して働く方であることを、「あなたたちを救う」との約束を決して違えない方であることを思い起こさせるために(「小さな者から大きな者に至るまで／彼らはすべて、わたしを知るようになり、わたしは、彼らの不義を赦し、／もはや彼らの罪を思い出しはしないからである。」ヘブライ人への手紙 8:11-12)。改めて「約束を待ち望む」私たちとするために、今日も呼びかけておられるのです。